UNIVERSITY OF FUKUI
BRAND STORY
2021
Exciting Research

国立大学法人
福井大学
UNIVERSITY OF FUKUI

https://www.u-fukui.ac.jp

福井大学広報センター
本学の許可なく、掲載の記事や写真等を複製・転写することを禁じます。

入試に関するお問い合わせ
教育学部・工学部・国際地域学部：学務部入試課 TEL.0776-27-9927
医学部：学務部松岡キャンパス学務課 入試・学生（医学）担当 TEL.0776-61-8246

UNIVERSITY OF FUKUI
BRAND STORY

この人たちの白熱ストーリー。

1 附属幼稚園（福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 1年）
上田 晴之 教諭

2 医学部 医学科 地域医療推進講座
山村 修 講師

3 教職大学院
半原 芳子 准教授

4 大学院工学研究科 原子力・エネルギー安全工学専攻
松尾 陽一郎 准教授

5 国際地域学部
クリストファー・ヘネシー 助教

6 医学系研究科 修士課程 看護学専攻 1年
堀 拓也 さん

7 国際地域学部 4年次
渋谷 桃佳 さん

福井大学の学生・教員・卒業生には、人をワクワクさせたり、ドキドキさせたり、こんな人になりたいと思わせてくれるような人が多い、という実例、7件。

Exciting Research

2021

HARUYUKI UEDA

子どもは1日で変わる。
大人はどうか。

「ガラスの天井」という言葉がある。当人の資質や努力にも拘わらず、女性にはキャリアを阻む見えない障壁がある、という意味だが、逆もある。保育士が、まだ「保母さん」と呼ばれていた時代。上田先生は、そこに挑戦した。

1 Exciting Person

子どもの成長する姿に感動しないわけがない。

「保母さんになる、だとぉ!」
上田先生のおじいちゃんは、激怒した。15年ほど前、大学卒業後の進路を家族に打ち明けたときのことだった。「保育士」という資格名称はすでにあったが、一般の人にとってはその仕事は“保母さん”、女性の仕事というイメージだった。おじいちゃんの頭に血が上ったのも、まぁ無理もない。
だが、上田先生の決意は固かった。
「教育学部に入って、最初は社会の先生になろうと思ってたんです。でも、3年の時、保育実習があって、それがあまりにも楽しくて、しかも衝撃的で…。1日一緒にいただけで、子どもの成長がわかるんです。3、4、5歳の子って、朝できなかったことが、お昼にはできるようになったりするんですよ！『おはよう』っていって迎えた子を、『また明日ね』って送り出す、そのときにはもう別人。その日、どんな言葉掛けをするか、どんな遊びをするかで、その成長を支援することができる仕事なんです、保育士っていうのは」
その仕事の魅力の前で、男とか女とかは関係ない！と、上田先生は思った。で、おじいちゃんの怒りの矛先をかわし、保育士としてのキャリアをスタートさせた。とはいえ、そこは長年にわたって“女性の職場”だった。ベタなところでいうと、更衣室がない、とか。

自分なりの保育って、なんだろう。

「世の中的には、男性の保育者は荒っぽいと思われがちで、それは保護者にとって不安要素になるから、とにかく丁寧に丁寧に。僕、声のトーンも1オクターブくらい上げて『はい、みなさんおはようございまーす』とかやってました」
…それはちょっと気持ち悪いかも…。
「そうですよねぇ（笑）。でも、僕なりに現場にフィットしようと一生懸命だったんです」

そんなこわばりが解けたのは、幼稚園、小学校、中学校が一体になった公立幼稚園に赴任したときのこと。職員室で中学校の先生から「君、女性になりたいの？」と言われたのだ。念のために断っておくと、上田先生は性的マイノリティではない。その一言がきっかけで、自分らしい保育ってなんだろう、と考えるようになった。
「僕は運動が好きなので、運動と触れあい遊びをミックスした保育を自分なりに作っていこうと思ったんです」
たっぷり運動する保育を、“荒っぽくなく”実践する。
上田先生は、長い時間をかけて自分らしい保育を形にしてきた。その取り組みは、地元のメディアにも取り上げられている。今は福井大学附属幼稚園に勤務する傍ら、大学院に通って、自分の保育実践を理論化しようと試みる。
子どもは1日で変われるが、大人が変わろうとすると、何かと時間がかかる。最初は反対していたおじいちゃんも、うん、立派にやっているんだな、と理解してくれたようだ。

Profile

附属幼稚園
上田 晴之 教諭
（福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 1年）
福井県出身。2002年福井大学教育学部卒業。同年4月より梅園学園梅園幼稚園勤務。2004年4月より福井市立幼稚園に採用。14年の勤務を経て、2018年から現職。

OSAMU YAMAMURA

瓦礫の街の地図帳として。

「僕も連れてってください！ 地図帳代わりになりますから」
1995年1月17日。阪神・淡路大震災が起きたとき、山村先生は福井県立病院で研修医として働き始めたばかりだった。関西生まれで、被災地には親戚や知り合いも多く、兵庫県西宮市にある兵庫医科大学で数ヶ月前まで学生生活を送っていた。医師としてはまだまだ未熟、行っても何ができるかわからない。でも、行かないわけにはいかないじゃないか！
「地図帳？ うん、それはいい考えだね」
県立病院を中心に結成された医療救護班のリーダーがアピールに応えてくれた。スマートフォンもなく、カーナビもほとんど普及していなかった当時のこと、確かに「地図帳」は役に立った。
「20名ほどのチームで行ったんですが、宿泊先とかがまずわからない。厚生省（当時）から『有馬温泉に宿を取りました』とか言ってくるんですが、地元の人ならわかると思うんですけど、神戸の被災地から有馬温泉まで行こうと思ったら、六甲山を越えなければならない。交通遮断がひどかったので、『そんなところに泊まってたら活動できません』と言って断りの電話を入れる、とか。そういう裏方の仕事がいっぱいありました」
…医師としての仕事は、どうだったのだろう。
「当然、『瓦礫の医療』をやるんだ！ と意気込んで行ったわけですが、着いたときはもう1週間経っていて、瓦礫の医療なんてどこにもありませんでした。だから、避難者の方にひたすら問診してましたね。病気を見つけるってことだけじゃなくて、生活でどんなことに困っているのか、どうすれば今の状況を少しでも好転できるのか。とくに薬切れの人が多かったので、その薬をどう工面するのか。そんなことで頭がいっぱいでしたね」

Profile

医学部 医学科 地域医療推進講座
山村 修 講師

兵庫県出身。1994年兵庫医科大学卒業。2001年福井医科大学（現・福井大学医学部）大学院医学研究科修了。1994年より福井県立病院に勤務。2000年国立循環器病研究センターを経て、2010年本学医学部医学科地域医療推進講座講師。2016年4月より福井県災害医療コーディネーターも務める。

ホットな現場には、這ってでも行け！

地震や台風、ゲリラ豪雨…。
災害のニュースに接するたびに、心が痛む。
救えたはずの命を救うために、医療には何ができるか。
山村先生は奮闘する。

もっと「いっちょかみ」の精神を！

それ以降、山村先生は災害と医療の問題に取り組んできた。阪神・淡路大震災が、医師としての進路を決めてしまったわけだ。社会的にも災害医療に向けた取り組みが活発化している。その一つがDMAT（災害派遣医療チーム）。災害発生後72時間以内に集中的に高度に訓練された医療班を送り込んで被災者の生存率を高める仕組みだ。
「DMATの活躍、ほんとにすごいです。発災直後に疾風のように現場に現れる。かっこいいしね（笑）。でも彼らが去ったあと、つまり発災から72時間が過ぎたあと、どうするのか。僕はそこが気になるんです。『災害関連死』の問題ですね。プリベンダブル・デス、予防することができた死、という言葉があります。死ななくてもいい人が、避難所暮らしや、在宅の場合でも生活環境の変化が原因でたくさん亡くなっている。予防できたはずなんですね。医療に携わる者として、これは非常に悔しい」
災害のあと、メディアの報道が終息してからも、被災者には長い「生活」の時間が続いていく。山村先生は、その生活を支える医療のために、保健師や介護士など、地域の多職種との連携を模索している。だから、今もさまざまな「被災後」の現場に足繁く通っている。
「関西弁で『いっちょかみ』という言葉があるじゃないですか。用もないのにやってきてとにかく何か関わろうとする。阪神・淡路大震災以降の僕は、まさに『いっちょかみ』でした。でも、現場に出ないとわからないことって、たくさんあるんです。災害医療だけじゃなく、医療って人間を診るものですからね」
若いみなさん、ぜひ『いっちょかみ』になってください。

Exciting Research 2

YOSHIKO HANBARA

母語を守ること。それは、その子の大切な軸足を守ること。

街で外国人を見かけること、増えたような気がしません？
首都圏や観光地ばかりでなく、ここ福井でも。
定着して、仕事をして、暮らしている人たち。
彼らの母語と日本語の関係って、どうなってるの？

3 Exciting Researches

母語が弱ると、人はどうなるのか。

メイちゃんは、中学1年生。週に1回、放課後に福井大学に通っている。中学生なのに大学で勉強？ 天才かよ！と驚愕する人もいるかもしれないが、早まってはいけない。メイちゃんが学んでいるのは、ごく普通の中学校のカリキュラムだ。ただ、ちょっと違うのは、それを母語である中国語と第2言語である日本語、両方で学んでいる、ということ。日本人の学生と中国からの留学生が、チームを組んでサポートしている。たとえば『平家物語』の単元を学習するときに、中国人留学生が参考資料として『三国志』を持ってきて、中国語で解釈を広げたり深めたりする。二つの言語の間を往還することで、より豊かなイメージが蓄積されていくわけだ。

半原先生がメイちゃんと出会ったのは6年前、福井大学に着任して間もなくのことだった。「それまでメイちゃんは中国語で家族とコミュニケーションをとって、お友達と交流して。中国語で考えて中国語で人とつながってきたんですね。中国語がメイちゃんの幹なんです。メイちゃんは頑張り屋さんだから、どんどん日本語を獲得していきます。でも、そこで母語のサポートがないと、母語が弱くなっていって、家庭でも親子のコミュニケーションも成り立ちにくくなってしまう。もっと言うと、それまで中国語で構築されてきた思考や感情まで弱くなってしまう。母語も日本語も、どちらも自分を支えきれない、ダブルリミテッドと呼ばれる状態に陥ってしまうケースがあるんです」

外国語を学ぶためには、母語を深く耕すことが不可欠なのだ。半原先生は、かつて海外で自分の言語教育を深く問いなおす事態に直面したことがある。

海外流出促進装置？

話は20年ほど遡る。半原先生は、ヨルダンにいた。青年海外協力隊の一員として、ヨルダン大学の青年たちに日本語を教えていたのだ。「これはペンです」「あれは木です」…われわれが英語教育を受けてきたあの感じで、日本語の単語や文型を一生懸命教えていた。

「日本語教師っていうのは、日本語を教えるのが仕事、だと思っていたんです」…いや、それはそうだろう。違うのか？

「ヨルダン大学はヨルダンのトップレベルの国立大学で、学生たちはとても優秀なので『これはペンです』みたいな教育でもどんどん第2、第3外国語を吸収していく。そして、それを自分の強みとして、海外に仕事を求めて出て行くケースがとても多いんです。言語教育（外国語教育）が、本当ならヨルダンを支えていくはずの若者たちを流出させ、その地域が空洞化していく。私はそんな装置になっていたんだな、と」

無自覚な中身のない言語教育…半原先生は、当時を振り返ってこう反省する。

そ、そこまでご自分を責めなくても…。

「第2、第3言語（外国語）を学びながら、母語を守る。それは、その人が自分自身を肯定できる、ということだと思うんです。海外に出て行っても、自分の中で母語が育っていれば考え方に軸ができる。帰る場所は自分の中にある。それを大事にしていきたいんです」

そんな半原先生の思いを受け継いで、学生たちがメイちゃんのサポートを続けている。学生は卒業していくので、先輩から後輩へ、プロジェクトは引き継がれていく。もうかれこれ6年。「ここで勉強するのがいちばん楽しい！」メイちゃんは、雨の日も雪の日も、元気に通ってくる。

「メイちゃんがそう言ってくれるのは、私の誇りです」

Profile

教職大学院
半原 芳子 准教授

大分県出身。2012年お茶の水大学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程修了。2013年10月福井大学大学院教育学研究科特命助教。2017年4月同研究科准教授。2018年4月より現職。「NPO法人子どもLAMP」のメンバーとして2003年より東京・神奈川の外国にルーツを持つ子どもへの学習支援も行っている。

YOICHIRO MATUO

研究以外にも、意外な活動をしていた大学院生時代。

明日から休みだ!
と、いうときは誰だって嬉しい。どこへ行こうか、誰と遊ぼうか、とウキウキする。読者諸君はご存じかどうか知らないが、大学に所属する研究者は実に多忙なのである。ロングバケーションをエンジョイしているのは学生だけ。松尾先生も、まとまった休みはお盆とお正月くらい。そのたまの休みに何をするかといえば、お菓子を買い込んで、部屋にこもるのである。先生、大丈夫?
「引きこもりじゃないですよ! 小説、書いてるんです」
先生が小説を書き始めたのは、大学院生のとき。研究漬けの毎日の中で、気分転換のために始めたという。
「研究を続けていると、どうしてもつらい時期というのがあるんですよ。八方ふさがり、みたいな。それに、僕が所属していた某大学の原子力の研究室って、ぜんぜん女性に縁がなくて…(泣)。そういう男たちの、なんだかなぁ、みたいな話を書いて、面白がっていたんです」
そんな中で書いた『鳩とクラウジウスの原理』は、角川書店の第1回野性時代フロンティア文学賞を受賞してしまう。さぁ、これから作家街道を驀進だ…とはならなかった。
「研究の世界でやりたいことがあるから」
先生が専業作家の道を選ばなかったことによって、その作品数は減ったかもしれない。だが、その研究の進展は社会に大きな利益をもたらす、はずだ。
先生の祖父母は長崎出身。親戚が集まるときには原子爆弾の体験が話題になったりもした。原爆が落ちたときに、その放射線自体をなくすことはできないのかな…松尾少年は、小学生ながらに考えていた。長じて放射線生物学を専門とする研究者になった。

Profile

大学院工学研究科 原子力・エネルギー安全工学専攻
松尾 陽一郎 准教授

大阪府出身。2009年-2012年3月独立行政法人日本原子力研究開発機構 博士研究員、国立大学法人福井大学 特別研究員を兼任。本学大学院工学研究科原子力・エネルギー安全工学専攻特命助教、2020年本学同研究科同専攻准教授。

理系の研究者は変な人が多い?!
だが、それがいい。

専門的な研究、とりわけ理系のそれには、ちょっと近寄りがたい印象がある。
だって、あの人たち、なにを言ってるかわからないし、変人じゃない?
というような偏見はお捨てなさい。
その頭の中は、すごく面白いんだから!

Exciting Research 4

今だからこそ必要な放射線生物学。

放射線が生物やDNAに与える影響を研究している。たとえば、100ミリシーベルト以上の放射線を浴びると、ガンになる確率が有意に上がることはわかっているが、それ以下の線量ではどうかというと、まだ答えは出ていない。また、被ばく量を計測する方法は、現在、ガラスやプラスチックが受けたエネルギーを人体への影響に換算する方式が中心だが、先生の研究では、人工的に合成したDNAを用いた新しい生体への影響を評価する手法の開発にも取り組んでいる。
「フィルムバッジで模擬的に評価するよりも、DNAが切れたかどうか、というより生体に近い評価方法ができないか、という研究です」
先生の研究が進展すれば、原子力発電所などで働く人の安全に貢献することが期待される。
原子力の利用についてはさまざまな意見があるが、原発は現に存在しており、それを安全に扱うための研究は、むしろ今だからこそ強く求められている。
「いきなり明日から原子力ぜんぶやめます、といっても次の日にすぐに更地になるわけじゃない。少なくともあと30年はかかるし、核燃料や廃棄物の処理にはもっと時間がかかります。だから、もっとたくさんの人にこの問題に興味を持ってもらいたいと思うんです」
先生にとって「小説」とは、このストレスフルな仕事からの逃避ではない。「研究」の世界にうごめく人たちについて描写することで、理系の分野に興味を持つ人が増えるように、との期待もある。確かに、先生の作品を読むと、理系の人々の「なんだかなぁ」な世界が妙にいとおしく感じられはする。うん、理系の変な人たち、悪くないかも。

HENNESSY CHRISTOPHER

方言がわからない外国人の
つらさと楽しみを、君たちはわかるか！

たとえば関西の人は、東京でも外国でも堂々と関西弁を話す。
自分の言葉と、そのバックボーンのコミュニティに、自信があるのだろう。
言葉が人と人をつなぎ、言語共同体を形成する。
だが、それが他者を阻むバリアになっているとしたら…。

5 Exciting Research

尼崎のディープな方言世界。

「クリスせんせ、その気取った東京弁がアカンのちゃいます？」
15年前、クリス先生は兵庫県尼崎市にいた。来日して神戸大学で言語学を学んだ後、尼崎の工業高校で英語を教えていたのだ。だが、どうも生徒たちが心を開いてくれない気がする。それで放課後、生徒たちに聞いてみた、「僕の授業、つまらない？」そしたら、その答え。
「いや、ちょっと待って。僕は日本語の上級クラスを取ってたけど、関西弁は習わなかったよ」と返す言葉も東京弁になってしまう。
世界のどこでもそうだが、第2言語として学ぶのは教科書のような標準的なモデルだ。だが、実際の言語生活はそれぞれの方言で営まれていて、標準語にない語彙やニュアンスがふんだんにある。外国人には理解が難しいだけでなく、そのコミュニティに入っていくことを妨げる要因にもなっているのではないか。
「漫才は関西弁だし、九州弁や青森弁が出てきても、日本人ならだいたいわかるでしょう？ でも、僕のような外国人には難しいし、わからないこともある。そして、日本人には外国人が味わっているこのつらさや面白さが理解できない」
…え、面白さ？ つらいだけじゃなくて？
「そう、これは面白い！ 方言とコミュニティ、そこには社会言語学のとても興味深いテーマがあります」

方言隔世遺伝仮説？

地方の職場で働き、地方で暮らす外国人は、方言と出会って、方言環境の中に入って、どんな意識を持つか。そこで適切な日本語教育とはどんなものか。ここ福井にも、福井弁がある。クリス先生は、ひとつのケースとして、福井で働く外国人労働者の日本語環境を分析している。
「厳密に言うと、福井弁の中にもいろんな方言があります。福井市と大野と勝山と越前と鯖江と三国と、微妙に違う。各地でインタビューをして、それをマップにまとめています。もうひとつ、気づいたことがあります。20代、30代の人はあまり方言を使わないのに、それより若い世代、5歳くらいの子どもはけっこう福井弁を使っている。これはまだ思いつきのレベルなんですけど、両親はだいたい働いてるじゃないですか。そうすると、子どもの面倒は誰が見るか。おじいちゃん、おばあちゃんですよね。そんな形で、方言のジェネレーションスキップが生まれているのかもしれない」
外国人がそのコミュニティにソフトランディングして行くには、おじいちゃんや子どもたちと仲良くなるのが早道かもしれない。そんなわけで、クリス先生の授業は英語と日本語、ときどき福井弁、なのである。

Profile

国際地域学部
クリストファー・ヘネシー 助教

アメリカ・メリーランド州出身。2004年メリーランド州立大学（言語学・日本語学専攻）卒業。2011年オーストラリア国立大学大学院翻訳学準修士課程修了。2013年早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程修了。2013年より本学語学センター、2016年より国際地域学部所属。2019年4月より大阪大学大学院文学研究科日本語学博士後期課程在学中。

6 Exciting Research

認知症の父が、
専門看護師への道を開いてくれた。

人生100年時代、なんだそうである。
高齢者のケアに、社会的な負担がどんどん増えていく、らしいのである。
だが、高齢者はただケアされるだけの存在なのか。
自分の家族が、あるいは自分自身が高齢者だったら、どうか。

医療者としても家族としても、未熟。

看護師としては、認知症のケアについて知識も経験もあった。だが、自分の家族がそうなると勝手が違った。
「ゆっくり話すとか、患者さんに目を合わせてとか、こちらが感情的にならずにその人を興奮させないようにとか。ポイントはいろいろと習得していましたし、患者さんの家族の方にも『落ち着いてゆっくり関わるといいですよ』なんて言ってきたんです。でも、2年くらい前に自分の父が発症すると、冷静ではいられませんでした」
ある日、お父さんの眼鏡を買いに一緒に出かけたときのこと。店員に「父は認知症なもので…」となかなか言えない自分がいた。認知症らしいと気づいた店の人も、それに合わせてゆっくり話すということができない。
「社会は、まだ認知症の人を受け止め切れていない。なによりも僕自身が、医療者としても認知症患者の家族としても、まだまだ未熟だなと思いました」
家族として未熟、という言い方には、何か深い意味が込められている。病に向き合うことは、人を成熟へとせき立てるのだ。看護師として7年のキャリアを持つ堀さんは、改めて大学院に入学し、専門看護師への道を歩むことになった。

TAKUYA HORI

「ありがとうな」と声を掛ける。

昼間は勤務先の福井赤十字病院で看護師としての仕事をこなし、夜は母校の福井大学医学部看護学科の大学院に通う。当然、身体的にはきつい。
「でも、精神的にはむしろ楽です。病院に勤務していると、職場と家庭の行き来で世間が狭い。大学院という第3の場所があることで、病院でやってる仕事を客観的に見ることができるんです。『全国的に見てどうなの？』とか『どんな意味があるんだろう』とか、振り返って疑問に思うこともあるじゃないですか。大学院で、先生とか院生同士で話をしていて、そのへんスッキリするというか、視野が広がる感じです」
臨床の現場に出ると、自分の中にさまざまな問題が蓄積していく。堀さんは今、それをひとつひとつ解決し、先行研究と照合しながら言葉にしていく作業を続ける。その成果を、快く大学院に送り出してくれた職場の仲間に還元したいと思っている。
忙しい毎日の中、堀さんが学び直しをするきっかけとなったお父さんと過ごす時間は、どうしても少なくなりがちだ。
「最近、父が急に家事をするようになったんです。家族の中で役割を認めてあげるのは、認知症のケアとしてとても大事なんで、そのたびに『ありがとうな』って声を掛けてるんですが、それは、家事をしてくれていることに対するお礼、だけじゃないです」
そこには、父と子が歩いている道がある。

Profile

医学系研究科 修士課程 看護学専攻 1年
堀 拓也 さん

福井県出身。2012年福井大学医学部看護学科卒業。同年より福井赤十字病院に勤務。2019年福井大学大学院医学系研究科看護学専攻（修士課程）老年看護専門看護師課程入学。

MOMOKA SHIBUYA

地域を元気にするスムージー、いかがですか？

人がビジネスに取り組もうとする動機には、どんなものがあるのだろう。
金を儲けたい、いい暮らしがしたい…それは、まぁそうだろう。
でも、それだけか？
もっとこう“愛”みたいなものがあるんじゃないのか？

Exciting Research 7

若者の健康問題と農家さん。

国際地域学部には、「ベンチャービジネス概論」という授業がある。講義を受けるだけでなく、実際にビジネスプランを作成する課題が与えられる。渋谷さんが選んだのは、スムージーだった。
「その頃、地元の農産物直売所でアルバイトをしていたんです。お客さんから『この野菜、どんな料理に使うの？』とか聞かれることも多かったんですけど、私、ほとんど答えられなくて…。せっかくだから勉強しようと思って、野菜ソムリエの資格を取ったんです。で、それを生かしたビジネスにしたいと…」
野菜に関するビジネスもいろいろ考えられるだろうが、なぜスムージー？
「野菜をたくさん食べるのって、けっこう難しいと思いませんか？ 厚生労働省は1日350gの野菜を摂りましょう、っていうんですが、だいたいみんなそこには届いていないんですね。とくに20代の若い人は、あと120g足りない。スムージーなら飲むだけなので、お手軽ですよね」
なるほど、栄養バランスが崩れがちな現代人の食生活、という課題を解決しようと…。
「もうひとつ解決したい課題があって、直売所って、売れ残って廃棄する野菜が多いんです。捨てられたり、農家さんに持って帰ってもらったり…。もったいないですよね、せっかく一生懸命作ったのに。スムージーならそういう食品ロスの解決にもなります。形が不揃いで出荷できない野菜も使えますしね」
それを安く譲ってもらえれば、原価を下げることもできる。おっ、ビジネスっぽくなってきたぞ。

夢は全国展開？

売り方の面でも、独自の工夫がある。その人の体調や身体の悩みをカウンセリングし、一人ひとりに合わせて野菜やハーブ、スパイスを調合、直売所で対面販売する構想だ。一人ひとりに合わせて作る、という「特別な一杯」感は、確かに大きな付加価値になるだろう。
「それに、農産物直売所って全国各地にありますから、福井からスタートして全国展開、ということも考えています」
…まるで新進気鋭の起業家の話を聞いているような気がしてきた。それもそのはず、渋谷さんのプランは「福井発！ビジネスプランコンテスト2018」で、グランプリを受賞したのだ。福井の銀行や企業経営者が審査員を務めるこのコンテスト、しかも社会人も参加する「一般の部」での受賞。これ、ほんとに起業できるんじゃ？

「何度か試飲イベントを開いて、手応えを確かめているところです。解決しなければならない課題も見つかってきているので、ひとつずつ乗り越えていきたいと思っています」
と柔らかな笑顔で語る渋谷さん。そこには、このビジネスで一山当ててやろうという野心よりも、限りない「野菜愛」と「地元愛」があった。

Profile

国際地域学部 4年次
渋谷 桃佳 さん

福井県出身。2016年高志高等学校卒業。同年4月、福井大学国際地域学部入学。2年次に地域創生アプローチに進む。2018年12月、地域経済の活性化につながる新事業のアイデアを競い合う「福井発！ビジネスプランコンテスト2018」一般の部でグランプリを受賞。2019年4月、JA直売所「喜ね舎 愛菜館」でスムージーの試飲イベントを開催。同年7月、福井市中央公園で行われた野外音楽祭「ワンパークフェスティバル」の飲食ブースに出店。2020年1月、第6回人間システムデザインコンテスト（HSS-DC）最優秀賞受賞。